SHINGON HORONIC

色 は 匂 へ ど

IRO WA NIO E DO

PHOTO SHU FUJIWARA

特集　明恵上人の世界

連載　大師のまねび
真言密教への誘い

平成十一年弥生一日発行　巻十

和光同塵（わこうどうじん）

真言密教の教主は大日如来
弘法大師が恵果阿闍梨から授かった名前が
遍照金剛です

どちらも光に満ちる名前です
太陽光線を直接見ると眼が痛くなってしまうように
大日如来の光も弘法大師の輝きも
現代には強すぎるのかも知れません
しかし満開の桜を美しいと感じられる
感性があれば大丈夫です
この桜の美しさが大日如来そのものですし
弘法大師の心です

編集主幹　阿部龍樹

特集

夢の明恵上人　3

日本の心と形　9

現代の道しるべ
やすらぎを求めて
阿字観入門　11

好評連載

大師のまねび　竹内信夫　15

真言密教への誘い　西宮紘　16

新刊紹介

僧侶と哲学者　新評論刊

観蔵院　金剛界曼荼羅ＣＤＲＯＭ　大法輪閣

染めと織りの歴史手帖　17　ＰＨＰ

特集　夢の明恵（みょうえ）上人

写真　吉村正治

明恵上人はほかの鎌倉時代の祖師達とちがい、一宗を興したわけでもなく、論争や栄達を好まず、ひたすら自らの行に専念しました。しかしその人柄と明せきな理論に多くの人が集まりました。
建礼門院も北条泰時もそして多くの女性達も。
自らの夢を記録した『夢の記』を著されました。

松の上で瞑想する明恵上人

松の上に静かに瞑想する明恵（みょうえ）上人の絵は見る者の心をなごませる。静かな拡がりと限りない優しさと豊かさが感じられる。

これほど自然に人がとけ込めるのだろうか。全く自然に。

明恵さんは海に浮かぶ美しい島に恋文を出したり、落人（おちうど）をかくまったり、昼寝をする牛の前を通るときにも腰をかがめるほどの優しさをもっている。

しかしこのお姿の静寂さや優しさの内には想像も出来ないほどの強靭な心を秘めている。

権力や武力に迎合しないばかりか、自分に厳しく自らの母と慕う仏母像の前で己の右耳をそいでしまう。

この絵は明恵の弟子、成忍（じょうにん）が描いたものだが明恵の左側から描いて右耳を隠している。

この絵ほど明恵上人の本質を端的に表しているものはない。

表に現れる慈悲と内に秘めた強靭な精神力、その二つが明恵上人の中で一体化され不二となった姿がよく描かれている。

明恵上人の生きた時代

明恵上人（1173～1232）は平安から鎌倉に時代が移る激動の中を生きられた。政権が朝廷から武士の平家へ、そして源氏の鎌倉へ。その源氏も滅び北条氏が政権を執り時の三上皇を配流、天皇を廃位させ、新しい天皇を即位させた。

その間、東大寺が炎上したり、大飢饉がおこったり混乱した時代だが、一方で優れた僧が続出した。

真言宗を中興した覚鑁（かくばん）上人
和歌の中に曼荼羅を詠んだ西行（さいぎょう）法師
臨済宗を開いた栄西、曹洞宗を開いた道元、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞など。

四歳でわが身を損なおうと思う

四歳の時、父が「美しいから大きくなったら大臣殿に仕えさせよう」といわれた。その時すでに法師になろうと思っていた明恵さんは驚いて、自らの身を傷つけようと思った。縁から落ちようとしたが人に抱きとめられ、今度は焼けた火箸を顔に当てようとしたが、ためしに腕に当てたところあまりの熱さに泣き出し、顔には当てられなかった。

梅尾高山寺（とがのおこうざんじ）

幼いころ薬師丸とよばれた明恵は母が神護寺に祈って授かった子供でした。母は神護寺の本尊薬師如来にわが子を捧げる気持ちで薬師丸と名付けました。

十三歳で死のうと思う

今は小学生や中学生の自殺が問題になるが、明恵上人も十三の時に真剣に死を考える。歴史上の名僧の中にほかにも十一才から十三才位に真剣に死と対面した人がいる。

真剣に死と向き合うことは、また生と真剣に向かうことでもあり宗教者の必須条件かもしれない。

建礼門院（けんれいもんいん）への授戒（じゅかい）

平家一門が全盛の頃、建礼門院が明恵に授戒を頼んだ。明恵がいくと建礼門院は高座の御簾（みす）の中から手だけを出していたので明恵は

「私は武士湯浅家の子で身分も低い者ですが釈尊の弟子となって久しく、高座に上らず戒を授け法を説けば師弟ともに罪に落ちると経にあります。お釈迦様の教えに背いてお言葉に従うことは出来ないので、どうかお心にかなう外の法師を招かれて御授戒ください。」といって断られた。

建礼門院は驚いてすぐ御簾から出て高座に明恵を座らせ戒を授かりその後も深く明恵を帰依するようになる。

北条泰時との出会い

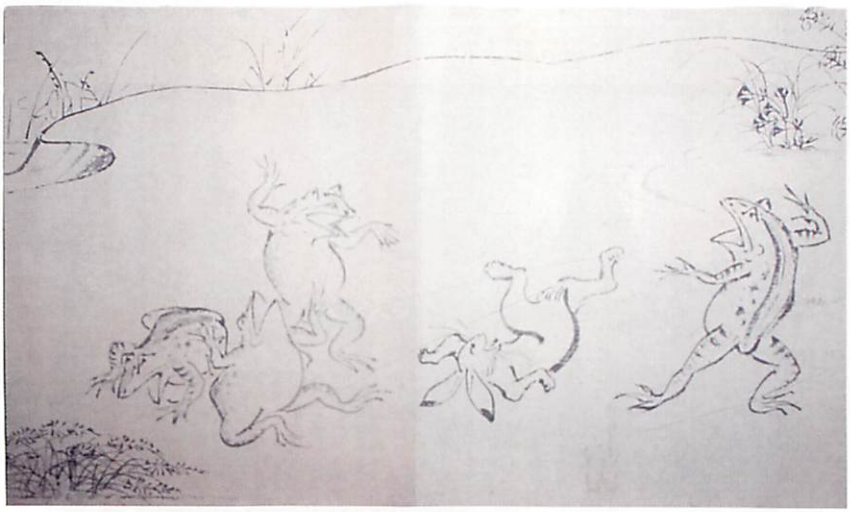
承久の乱の後、鎌倉方に破れた朝廷方の人々が明恵を慕って高山寺に集まる。鎌倉の北条泰時が京都に入ると、高山寺が落人をかくまっているというので、明恵が泰時の前に引き据えられる。明恵は

「この山は三宝寄進の殺生禁断の聖地です。鷹に追われる鳥も、猟に追われる獣もみなここに逃れて命をつなぎます。ですから敵に追われてからくもこの山に入った人を、私のわが身大切さに山から追い出して敵に身命を渡すことは考えられません。釈尊は前世で飢えた虎に身を与えました。そこまでの大慈悲にはおよびませんが、これぐらいのことであれば袖の中でも袈裟の中にでも隠しましょう。もしこのことであなたの政道が困るのであれば今すぐこの首をはねてください。」

泰時は感涙を流し非をわび明恵上人を輿に乗せ高山寺まで送り届けた。

その後、泰時は何度も高山寺に明恵を訪れ教えを受ける。やがて発布される御成敗式目（貞永式目）は永く明治まで日本の法の基本となるが、明恵上人の教えによるところが大きい。

明恵を頼る貴族や武士の女性達の多くが明恵の徳にふれて出家、やがて善妙寺という寺を建立する。彼女たちがうつした写経は今も高山寺に伝えられている。



高山寺に伝わる鳥獣戯画

論争を好まず

明恵は若いときから講話がうまく、理論もぬきんでていた。二十一歳の若さで東大寺の弁暁から公請の委嘱を受けている。公請は朝廷に参内して仏教の講演をすること。大変な名誉で多くの僧が名乗りを上げる。明恵は栄達を求め争うことをきらい故郷の紀州に帰ってしまう。また明恵を論破しようとする僧侶が来ても不在といって追い返してしまう。

またある人が「あの法師は光ります、この法師は飛びます、裸で断食をします。またある法師は凄い学者です、凄い祈祷師です。」との話に

「光るのが貴ければ蛍が貴いし、飛ぶのが凄ければ烏も凄い、着物も着ないで断食することが貴ければ冬眠するヘビも貴い。私は学者にも祈祷師にもなりたくはないしそう呼ばれたくはない。ただお釈迦様のお悟りの真実にふれたいだけです。」

およそ人になにかを誇ることを嫌った。

しかし明恵は学識も修行も群を抜くものがあり、またある力も秘めていた。

たとえば行法の中で手おけの水に蜂が落ちたから助けて来なさいといったり、いま雀の巣が鷹に狙われているからすぐに鷹を追い払いなさいといわれる。待者が急いでいって見ると実際にその通りのことが起こっている。

しかし明恵はこれらのことを弟子達に他言することを禁じている。

こうしたことは仏教の本源からはずれたことで、まして喧伝して人々を迷わせることは、明恵には耐えられなかった。

他力ではなく自力で

この時代に法然上人が『選択集』という本を書いた。論争を好まない明恵上人が『選択集』を徹底的に論破する『催邪輪』という本を書かれている。

人が何か目標を持ち達成するためには、まず心をその目標にむけて出発させなければならない。

宇宙飛行士の向井千秋さんが二度も宇宙へ行きグレン宇宙飛行士は七十七歳で再び宇宙を飛んだ。

二人とも「宇宙に行きたい。」という思いが彼らの宇宙飛行を可能にした。

「宇宙へ行きたい」という最初の目標がなければ宇宙飛行士向井千秋は存在しない。七十七歳のグレン飛行士もいない。彼らの強い熱意と努力がまた人の心を打つ。

仏教では悟りを求める心そのものを『菩提心』といってもっとも大切にしている。法然さんはそれがなくてもいいといったので、明恵上人は論理的に批判している。

いま「ありのままの自分でいいじゃないか」という言い方が、努力も工夫もしないでいいととられたり、なにか投げやりな生き方、他人まかせな生き方を勧める文化人も多いが、まず自分の中に目標を掲げることから出発することだ。

帆船が大きく帆を張ると未来への夢や希望が見えてくるように、それが自力の出発点になる。明恵上人もこの出発点を大切にしていた。

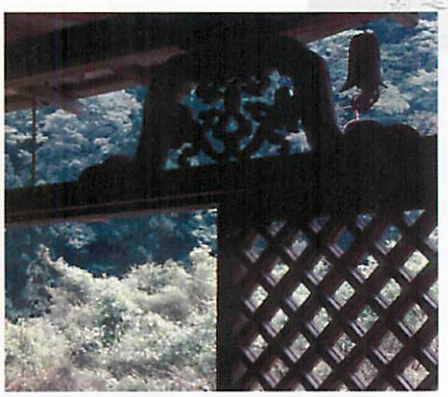
日本最古の茶畑

紅葉の古樹

明恵上人の『あるべきようわ』

明恵上人の限りない優しさと時の権力に全く迎合しないつよい心を支えているものはなにか。

それは常にお釈迦様の心を自分の唯一の基本にしていること。社会や世間の中になにか絶対的なものを持つと必ずそれに対する対抗勢力が生まれ、また争いが生まれる。明恵上人の絶対的なものはこの世間にはなかった。それは『お釈迦様の心にかなうかどうか』が唯一絶対の基準だったからだ。



建礼門院にも北条泰時にもまったく同じ気持ちで接することが出来る。島に恋文を出したり、昼寝する牛の前を通るときに腰をかがめるのも、同じ事。島にも大日如来の大きな命を見いだし、牛の中にも仏性という尊い心が有ることを発見しているからだ。

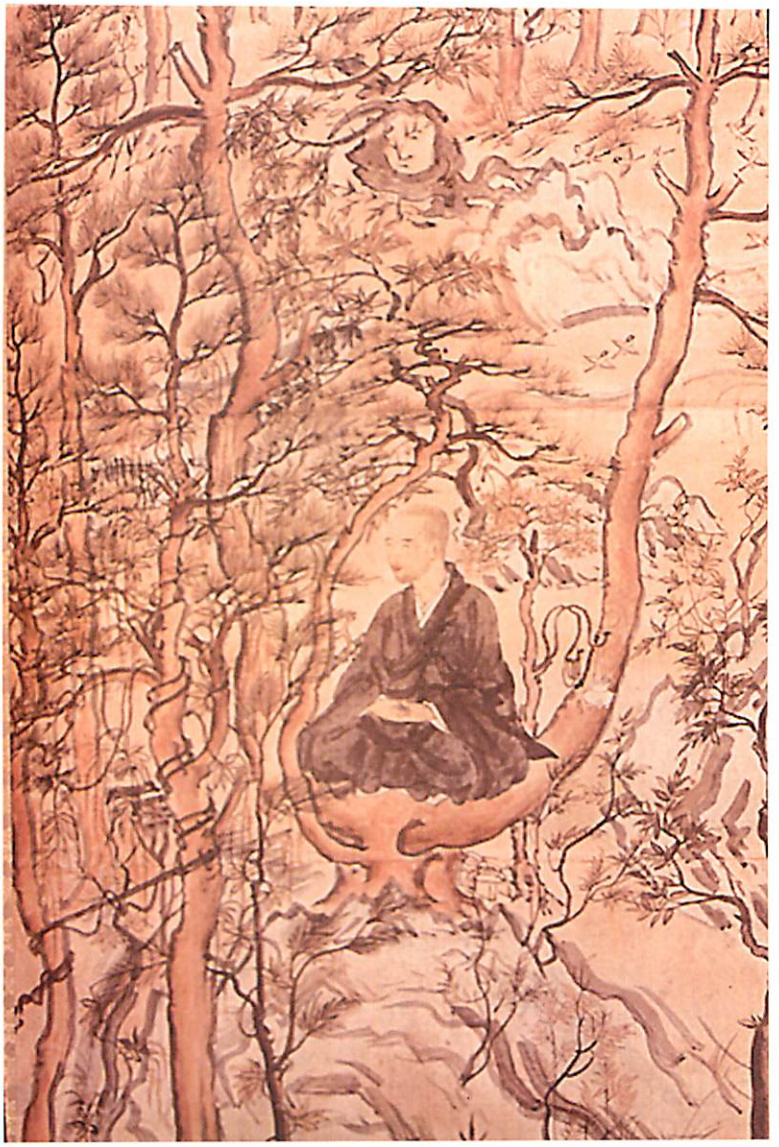
明恵上人には一つの座右の銘が有る。

『私には一つの明言があります。私は後生で済われようとは思っていません。ただ現世において
あるべきようにあろうとするものです。
聖経の中にも修行すべきように修行し、振る舞うべきように振る舞いなさいとあります。

今は何をしてもいいから、死後往生して済かればよいなどとはどの経典にも書いて有りません。』

この言葉『あるべきようわ』は後に誤解され儒教的に解釈され
『帝王には帝王の臣下には臣下の僧には僧の女には女のあるべきように』と読まれるが、明恵さんの『あるべきようわ』とは菩薩道の本源を歩む菩薩のように生きること。

明恵上人は華厳経をもとに『仏光観』という光に包まれる瞑想法を編まれる



そのとき唱える真言が光明真言

『おんあぼきゃ　べいろしゃのうまかぼだら　まに　はんどま　じんばら　はらはりたやうん』

高山寺の経蔵に納められた聖経（しょうぎょう）の多くが真言宗を中興した覚鑁上人（かくばんしょうにん）のコレクションであったり、また仁和寺の仏画で名を馳せた玄証などとの交流もあり、世俗を嫌った明恵が実に幅広い拡がりを持っていた。

明恵上人は華厳（けごん）を極め真言に到達しいろいろな意味で弘法大師の姿に良く重なる。そのことはまたあらためて紹介します。

つねに明恵上人の手元にあった犬の彫物

日本のこころと形

春は日本のもっとも
美しい季節です
桜が咲き　木々が新緑に映え
新しい生命が輝きだします
春には入学式や入園式が行われます
また各地で花祭りが営まれ
お釈迦様のお誕生を祝います
日本の美しい行事を
もっと大切にすることで
豊かな心が育まれます

PHOTO&TEXT　SHU　FUJIWARA

現代の道しるべ

やすらぎを求めて
阿字観入門

写真　吉村正治

阿字本尊　満月の中　蓮のうてなに浮かぶ梵字　阿字

私とは誰だろう
私の生命はどこから来たのか
そして命はどこへ帰るのか
また生きる意味は

子供たちの心にはこの根源的な問いが浮かびます。様々な想念（イメージ）が立ち現れ、そしてまた消えます。大きくなると、こうした問いを持ったことも考えたことも忘れてしまいがちですが。

今は
「あらゆるものに価値はない」
「生きることに意味はない」
といった本当に意味のない（冗談ではなく）無意味な意見が多数を占めていて、このような根源的な問いを持つこと自体が批判の対象からも疎外されています。

年齢の若い人、感性の豊かな人ほど、その疎外感や孤独を感じています。そして生命の実在感の希薄性が社会に蔓延して様々な現象を引き起こしています。それに対して本質的な原因がみえず表層だけをみた批評や意見が多い今日です。

静かな豊かな時が流れる

私は
「あらゆるものに価値がある」
「生きることに限りない意味がある」
と、思っています。

しかし、あらゆるものに価値や意味を発見する眼がなければ、ものの真価が見いだせません。

野球の野茂投手やイチロー選手も、彼らの才能を見いだした監督やコーチにあわなければ今の活躍はありえません。
彼らの才能を発見したコーチや監督の眼の確かさが、素晴らしい選手を世界に送り出しました。

お大師様のことばに
『眼明らかなれば途にふれて皆宝なり』
ということばがあります。

この『眼』とは心と同じと考えていいでしょう。なぜならこの文章に前の句がありそれは
『心暗きときはあうところことごとく禍なり』とあります。

心が暗ければどんなに良いものに出会っても、その良さや価値が見えません。このことは誰にでも思い当たると思います。

ではどうすればいつも『眼あきらかなれば』の状態になれるのでしょうか。

阿字観はそのもっとも良い方法です。

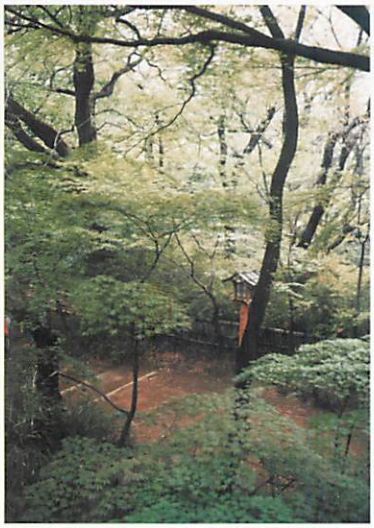
月輪の中に梵字の美しい阿字が蓮に浮かぶ阿字本尊の前にゆったりと座ります。眼を半眼にして、ぼんやりと阿字を眺め、ゆったりと呼吸をします。鼻からゆっくりと空気をすいます。このとき大切なことは清浄な気を宇宙からいただく気持ちです。そして口から息をゆったりと吐き出します。

呼吸はとても大切です。

優れた運動選手や芸術家は皆優れた呼吸をしていると思います。呼吸が浅いとイライラし集中力が出ません。喧嘩などをするときは呼吸が浅くなり肩で息をするようになります。

なんでもゆったりとした呼吸でするとうまくいきます。写経や書道で墨をするときも、がむしゃらにする人がいますが、墨は自分の呼吸にあわせてゆっくりとすると早く濃く、きめの細かい美しい墨がすれます。

不眠症や時差ボケは地球のリズムと体のリズムの不一致が原因だったりします。決まった時間に日の光を浴びることでリズムが取り戻せますが。深い呼吸は宇宙の波動と一致させるもっとも良い方法です。



真言密教、弘法大師の教えは些末の社会現象を超えた真に普遍的なものです。

そして『阿字観』の実修は『阿字観』を通して、生きる意味や生命の価値を見失った人々が、真の生きる意味を再発見したり、生命の価値を豊かに創造する最良の実践法です。弘法大師の教え、真言密教の素晴らしさは、生命の意味や価値を再発見しながらより普遍的な世界へ導かれるところにあります。生命の拡がりの中から宇宙の全存在を自己と対立した観察の対象ではなく、自心の内面的な広がりの中にあることが実感されます。『阿字観』を通して宇宙全ての存在が縁につながれたかけがえのない存在であることに気づきます。そこから他の生命や、生命だけでなく天空に輝く星々にも同じ生命の中にあることが実感でき、他の生命や存在にも慈しみの心、慈悲が生まれてきます。

阿字観に参加して　箕浦智子

山門をくぐると、明らかに空気も時間も違う空間に包まれてホッとする。本堂前の大きな銀杏達に挨拶をし、その空までの空間の深さに心を清めてもらう。一月毎に違う姿を見せてくれる本堂横の紅葉を前にすると、いつにもまして内省的になれる。その美しさに、むしろ心が空になることも多いのだが・・・。鳥のさえずり、虫の鳴き声、四季折々の木々や花、澄んだ空気に、日常の心の垢を洗い流してもらう。

それが宝珠閣に着くまでのいつもの行程だが、そういう自然の中で本来の自分自身を取り戻す距離と時間がとても大事なのだろう。いきなり座ってしまったら、未熟な私だと形だけで終わってしまうに違いない。

宝珠閣のあるところはちょっと神秘的なところだ。四季の移り変わりを敏感に映し出すというよりは、むしろ一年を通して変わらない何かを感じる。湧き出る水と何か関わりがあるのだろうか。“気”がよいところと教えていただいたが、確かに特別な場なのだろう。

そういった場にボーッといるだけでも心地よいのだが、皆で唱える般若心経に体も温まり、血や気が通い出すようだ。一つひとつの意味をかみしめる。瞑想に入る前のお話も、その前の行程で自分が感じたこととピッタリ合うことが多くてうれしい。違っても「あっ、そういう視点か」と、自分の中で何かが広がって、それはまたそれでうれしい。

体も心も準備できたところで、瞑想が始まる。川の流れと滝の音、鳥や虫の鳴き声をいっそう感じつつ・・・。深く入れる時とそうでない時とさまざまだが、ここ数年はやはり日常が異常に忙しいので、なかなか頭の中の声が静まらない。やはり忙しいのはよくないなあと思いつつ、それだけにこの貴重な時間が有り難く感じる。無理に静めようと思わず、この場にいること、この場にある全てを楽しんでいる。今までにたくさんのインスピレーションをいただいてきた。時間は正直なところ、短い。長ければいいというものでもないのだろうが、もう少し楽しみたいところだ。これからというところで終わることが多い。だが、最後の声明は最も好きな時間だ。声明が始まったとたん、スーっと涼しい風を感じ、本当に至福の時である。

その後の講義は、誰にでもわかりやすく、密教への入門編という感じである。昔はもっと多様な切り口からのお話しが聞けておもしろかった。多少物足りなくもあるが、だからこそ却ってこれだけ長く続いているのだろう。より多くの人が参加しやすいこのままの形を残していくことも大切だと思う。いきなりハードな話だとひいてしまう人も多いだろう。どんなにやさしい話でも、受け手によって浅くも深くも学んでいける、それが密教の真髄でもあるのだと思う。

ただ、もう少し対話の形をとれるといいと思う。参加者同士の交流とか学び合い、何かをそこで作り出していくという、もっと生き生きした、本当に自分がそこから何かをつかめるような、あるいは一体感を感じるような場が、また別にあるといいなと思う。

私自身はそろそろ“お客さん”を脱して、実際の身体を使って学んでいきたいと思っているが、三密会は内容、場所ともに現代の貴重なオアシスだと思う。

大師のまねび

竹内信夫

大師は自ら求めるところあって、志願して、唐の都長安に留学した。今から千二百年も昔の、延暦二十三年、西暦八〇四年のことである。そのことはよく知られていることであり、多くの大師伝や絵巻物に繰り返し語られ、描かれてきた。

この留学の成果として、大師が恵果和上から大悲胎蔵と金剛界の両部の密教体系を受法し、それを日本にもたらして日本真言宗の基礎を置いたこと、これも知らぬ人はいない。

『御請来目録』に記載されている経典・曼荼羅・法具は、請来当時の日本にあっては、誰もが目を見張るほどに新しいものばかりであった。逸早くその価値を見抜いたのは伝教大師であったが、その伝教大師が『御請来目録』を正確に書写したものの現物が、今も東寺に伝存している。

しかし、実に残念なことなのだが、大師直筆の『御請来目録』は失われて伝わらない。ただ、「草稿本」と言われるものの一部が河内長野の施福寺に所蔵されているだけである。大師の書いた原本は大同元年（八〇六年）に朝廷に上進され、それを伝教大師が見たことは間違いないのであるが、それ以後、杳として行方が知れない。大師を敬慕する者としては、今もそれがどこか人に知られないまま、再び見出される日を待ち続けているに違いないという希望を持ち続けていたい。

ところで、前回に少し触れた「風信帖」は大師の書の神韻を今に伝えてくれる至宝であるが、仁和寺の秘宝『三十帖策子』にも大師真筆が多く含まれていることは、真言宗信徒にも案外知られていない。

『御請来目録』に記載された多くの経典が、その『三十帖策子』に書写されていることも案外知らない人が多い。例えば、『三十帖策子』の第一帖から第四帖までは、般若の新訳華厳経四十巻で、これは大師が般若三蔵から直接に、その原典である梵篋とともに、頂戴したものである。『三十帖策子』の中でも格別に端正な写本で、大師自筆でないとはいえ、唐代写本の伝存品として貴重この上ないものである。

『三十帖策子』所載の経典類は写経生の写本であるが、それ以上に見逃せないのは大師自筆の帖である。特に、第二十六、二十七帖はすべて大師が自ら書写されたもので、中には、これも非常に珍しいものであるが、大師の書かれた梵字を見ることができる。大師は長安でインド人の師匠（般若はその一人）から、梵字悉曇を学んでおられる。第二十六帖に残る梵字テクストは、その時の、大師の悉曇学習の様子を今に伝えてくれるものだ。

個人的なことだが、私は、特にこの大師の書き残された梵字テクストに興味を曳かれそれを研究している。大師の書かれた文字に向かい合い、大師の長安における勉強ぶりを想像する時、私は、大師と直接対面しているような興奮と、そして緊張を覚える。有り難いことであると思う。

前二回にわたって、大師研究の第一義は、大師の書かれた文章や詩や、あるいは書翰を読むことだと私は書いた。それに加えて、『三十帖策子』の大師自筆の文字も私の大師探求の重要な手掛かりなのである。

梵字は今は、法要の折に書かれるくらいで、一般の人の関心は薄い。しかし、大師にとっては、悉曇の知識は密教の要諦を成す最重要なものであった。それゆえに、私は、大師を慕うほどの者は、やはり一度は、『三十帖策子』の梵字テクストを拝し、大師の長安における求道の姿を思い浮かべて欲しいと願う。『三十帖策子』にこそ、大師の菩薩行の精神が凝縮されていると思うからである。

竹内信夫　1945年生まれ　東京大学大学院綜合文化研究所教授　著書『空海入門』

真言密教への誘い

精神文化史　研究家　西宮　紘

前回に述べたことの中で再度喚起しておきたいことは、如来が菩薩形をなさっておられるということである。これは、実に、真言密教の中心的課題である即身成仏を端的にシンボライズしている。かくの如く来たる者に成るということである。ということは、さらにこのことをシンボリックに捉えるならば、この世にあるすべてのものを通じて真理は露わであるということさえ、積極的に呈示しているのである。真理は隠されているのではなく、そこに露堂々と現れていることを主張する。これはお大師様のもっとも大胆にして特徴的な教えであると私は考えている。もし、仏が、世俗の世界とは全く別の世界の存在であると考え、いたずらに幻を追うかのように、何らかの実体なりを求めるとすれば、それは外道（げどう）であると、お大師様は言い切っておられる（『秘密曼荼羅十住心論』巻三）。肝心なのは、かくの如く来る者に成ることである。

ところで、何者かに成るとは一体どういうことであろうか。卑近な例で言うならば、何者かに成ることを職業にしているのは俳優ないし役者である。かれらの役づくりには、セリフや化粧や衣装、その者の心と動きをものにしなければならない。総じて「かた（形）」というものの確立に全力が注がれる。そして「かた」は、観衆を魅了する登場人物の身・口・意の円融する動きに支えられているのである。あるいは、「かた」から入って「かた」を破ることを通じて固有の「かた」を確立するとでも言おうか。いずれにせよ観衆を説得し得る「かた」というものは、演ずる者の身・口・意（心）の円融する働きそのものである。そしてさまざまな役柄をそれぞれに演じわけることが可能になったとき、真の「かた」というものが確立されることになる。どの役柄を演じても、身・口・意が円融するとき、その役者固有の「かた」は堅固なものとなって現前する。かつて、私は、観世流後見役杉浦義郎氏の演ずる「鸚鵡小町」を観能する機会に恵まれたのであるが、私自身、完全に演者と一体化してさながら霊となって中空を浮遊するという体験をさせられ、能楽というものの物凄さをまざまざと思い知らされたことがある。演ずる者の真の「かた」は、それほど人を魅了しひきつけ憑依させる恐ろしいものである。演ずる者が小町に「成る」だけでない。それを観ている観衆さえも「成らしめてしまう」のである。

ここにおいて、身・口・意は一つのトリコトミーを形成しているのだが、およそ、ある人物を知るにはその人物の身体つきとその動き方、あるいはどのような言語でどんな話し方をするのか、あるいは、心の中で何を考えているかがわかればその人物を知ることができるのであるが、これらは相互に密接な関係にあることは誰しもよく知っていることである。他者を認知するには身・口・意のトリコトミーを通じて可能なのである。そして、このトリコトミーの相互作用の仕方の中に浮かび上がってくる「かた」こそ、その人物の性格なり個性として顕現するものであると言えよう。人は、その一生を通して「身」の働きと「口」の働きと「心」の働きによって、他者との相互関係における挫折と成功を重ねる中でその人独特の「かた」を形成していくのである。おそらく、一つの言語を話し始める頃にはすでに独特な「かた」の大枠は決定されてしまっているであろう。そして、この独特の「かた」は、時には人にとって恐ろしい桎梏（しっこく）（あしかせ）と化すのが常なのである。決してそこから抜け出すことのできない、いわゆる「業（ごう）」を負うた苦難の道をたどることになる。身・口・意の働きはこうした桎梏と化す傾向も含めて、「三業」のトリコトミーと言うのであるが、「業」とは本来「働き」という意味である。

西宮　紘　1941年生まれ　京都大学理学部物理学科卒業　著書『空海　火輪の時空』

新刊紹介

観蔵院　金剛界曼荼羅

曼荼羅の深淵な世界にゆっくり時間をかけてふれる機会は少ない。よほど縁のある人か密教の専門家か。

東京の真言宗智山派観蔵院では十余年の歳月をかけて金剛界胎蔵界の両界曼荼羅をお造りしている。その美しい曼荼羅がCDROMで見られるようになった。いままで近よりがたい曼荼羅世界が身近にふれられるようになった。

染めと織りの歴史手帖　吉岡幸雄

日本人はこんなに美しい着物を着てきた。最近のデザイナーや建築家など創造的な職業の人まで黒ずくめで現れるが、吉岡氏にいわせれば色を使う能力がないということ。

これだけ豊かな色を使いながら品がいい着物や布の数々。

見ているだけで楽しく豊かになれる。

僧侶と哲学者　マチウ・リカール

『現代の教育は、何よりもできるだけ多くの知識を蓄積し、私たちの知性を鍛え、私たちの効率を高めることを目指していますが、私たちをより良い人間にすることはほとんど考えていません。この「無益な知」のおびただしい量を眺めて、若者はただあわてるしかなく、そんなに努力をしなければならないことにがっかりしています。しかもそこには一番大事なものが欠けていることを、若者はしっかり見抜いています。』序文より抜粋

西欧的な近代教育を受けたものには仏教の教えや東洋の深さが見えにくい。かつて私は『ミリンダ王問経』を良く読んだ。ギリシャの王はインドの名僧と対論する中に仏教の深遠な世界に目覚めていく話で実にわかりやすく面白い。

『僧侶と哲学者』はフランスの哲学者の父と生物学を捨てて仏教に帰依した子供との対話で生きる意味を分かりやすく繙いている。

＊昨年の暮れに手作りのカラスミを頂いた。味も挨拶文も絶品でした。味は紹介できないので挨拶文を紹介します。

「さて、毎年、自然界の威力の下で四苦八苦しながらカラスミ創りにチャレンジ致しております。天候不順の厳しい中で闘ってきた鰡（ぼら）のタマゴが、魚河岸の仲買人から『特大、自信があります』とのメッセージと共に届けられました。残念ながら業者特有のブラフであります。しかし、その日の朝漁獲された新鮮なものです。『小粒だがきりりと辛い』の作品が出来るかどうか創意工夫を凝らしました。先日小生の師より雑誌に掲載された『カラスミ作りの名人』の記事が送られてまいりました。その技を、皆様への感謝の気持ち共々加味させていただきました。申し上げるまでもなく、お毒味の儀は厳粛に執り行いました。

さあ、ご判断は皆様の『舌』に委ねられました。

『いいねー』のお声で、来年の景気は回復基調。

九十八年初冬　T・F」

＊先日、友人から「なんで出羽三山で、柴灯護摩をやるの。あれって密教の行事でしょ。神社でときどき仏教の行事を見るし。それからこないだお寺で雅楽を見たよ。なんでお寺で雅楽なの」と質問をされました。一流大学を出た自称インテリです。

しかし日本の学校教育で日本の歴史が正しく学べないのには困ったものです。明治までの学問方法と明治以降の学問の方法が大きく変わってしまったことが原因です。何が問題かは立花隆氏が文芸春秋に連載していました。

大切なことは日本が永く神仏習合の中に来たという事です。神道と仏教はかなり早くから結びついていました。

雅楽も仏教とともに日本に伝わり、東大寺大仏殿の落成慶讃法要には雅楽が奉納されました。

＊雅楽といえば先日ＮＨＫの「課外授業」という番組で東儀秀樹氏が母校の小学生に雅楽を教えていましたが、とてもわかりやすく良い番組でした。戦後の教育では音楽も絵画も歴史も西洋のものばかりです。

日本の音楽や日本の絵画いずれをとっても世界に類のない高い芸術性を備えています。

義務教育の中に頭だけの知識としての日本文化ではなく、自らおこなえる日本文化を学べるプログラムが早急に必要だと思います。

＊さて「色は匂へど」も十号を数えました。早く弘法大師の特集をとの声もありますが、お大師様の世界は限りなく広いので特集号でも組もうかと思っています。

＊皆様のご意見ご感想などお寄せください。

E-mail　ryuju835@ra2.so-net.or.jp

www02.so-net.or.jp/~kukai168/

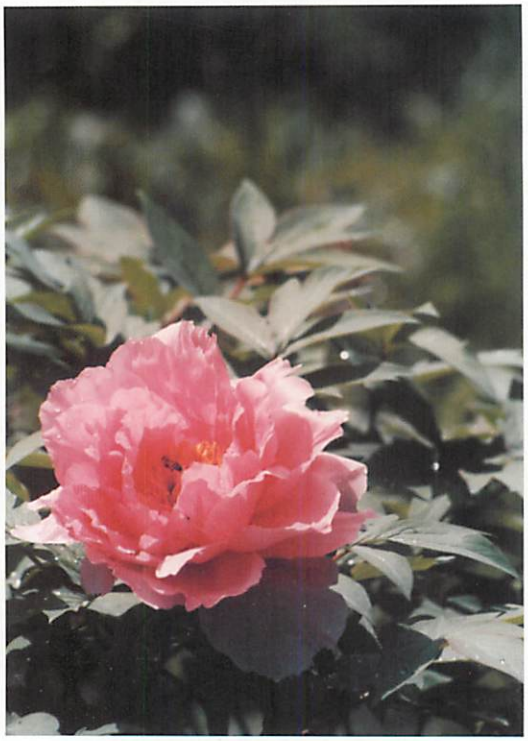


PHOTO SHU FUJIWARA

次回発行は７月１日予定

特集　星と真言密教

Editor RYUJU ABE　Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA　Special Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA
Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE　EDITOR RYUJU ABE　EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158-0082　東京都世田谷区等々力3-15-1　電話03-3705-1622　ファクシミリ03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第十号 平成十一年弥生一日発行